

タイトル

孔雀が見える

● 登場人物

北川 悠真 (きたがわ ゆうま) 25 歳
伊藤 信之 (いとう のぶゆき) 28 歳

■伊藤のアパート・室内（夜）

スマホカメラの視点。

興奮し、怯える伊藤が、自撮りで映っている。

伊藤「い、いた。また来てる、あれ！ 今、証明するから。あれが本当にいるって、俺、嘘ついてないって教える——ほら！」

開いた窓の外を映す伊藤。

静かで真つ暗な駐車場。

伊藤「（再び自分を映し）え？ た、確かにさつきまでそこにいたんだ！」

焦る伊藤がもう一度窓を映すと。

数メートル先に突然、孔雀が立っている。

伊藤「！」

瞬時に羽根を広げる孔雀——暗い視界が、月明かりを反射した極彩色に染まる。

伊藤「うわああああ」

慌ててスマホを落とす伊藤、乱れる視点。

■ファミレス内（数日後）

ハンディカメラの視点。

ドリンクバーのコーヒーを飲んでいる、

伊藤が映っている。

撮影しているのは、映像クリエイターの

北川悠真。

他の席では小学校高学年ぐらいの少年が、ひとりでオムライスを食べている。

北川「それでは伊藤さん、よろしくお願いします」

伊藤「はい、これも撮ってるんですね」

北川「あ、はい。撮影してます。それでさっ

そくなんだけど、孔雀の話」

伊藤「ええ。北川さんも見てくれたんですよね、俺があげた動画」

北川「見ました。毎晩姿を現す、孔雀の話——

——本当だったんですね」

伊藤「まさか撮影できるとは思ってたんですけど……」

タブレット端末を取り出し、操作する伊藤。

伊藤「これが毎日ですよ。こんな都会に孔雀がいるってだけで変なのに」

差し出される端末画面には、撮影された孔雀の姿。

北川「東京のど真ん中ですからね……」

伊藤「噂は結構増えてきたみたいですけど。

似たような話がいっぱい見たし……でもみんな、毎回同じみたいなんですよ」

北川「ええと……夜に窓の外を見ると、いきなり孔雀がこつちを見ている……だけ」

伊藤「そう、だけ。こつちを見てたかと思ったら、羽根を見せてくる、だけ」

北川「危害を加えられるわけでは、ない……」

伊藤「ちよつと目を離したらいなくなるんですよ。マジであれ、何がしたいのかわかんなくて」

北川「意味不明ですね……こつちから向かっていったらどうなるんですかね？　そも

そも敵意があるかもわからないですが」

伊藤「わかんないですね、どうなんだろ。確か孔雀の派手な羽根って、あれで雌にアピールしてるんでしょう？」

北川「ですね。羽根が綺麗なものも雄だけらしいし……伊藤さん、孔雀に惚れられることでもしたんじゃないですか」

苦笑する伊藤。

北川「まあ冗談はさておき……この映像が偽物だとは思ってませんが、こちらのカメラでも抑えておきたいです」

伊藤「え？」

北川「さつそく、今夜。伊藤さんの部屋に泊めていただけませんか」

■コンビニ(夕)

弁当を吟味する伊藤、撮影し続ける北川。

北川「いきなりすみません、早いほうがいいと思ひまして」

伊藤「いや、いいっすよ。俺もあれが何なのか早く知りたいですし……にしても北川さん、アクティブですね」

北川「一応ネタ探しは全力なんで」

伊藤「にしても動画あげてから1時間も経ってなかったですよ、DM来るまで。映像クリエーターってすげーなあ」

北川「苦笑」まだまだ有名作品もないペーペーですけどね……」

伊藤「やっぱ何よりも怖くてヤバい映像撮りたい、みたいな野望あるんですか」

北川「もちろんそれはあります。けど僕、自分の映像で誰かに希望あげたいんです」

言いながらのり弁を手に取り、買い物カゴに入れる北川。

伊藤「は？ ホラーとか化け物とかで？」

北川「ええ、そういうので。ホラーって嫌う人も多いけど、ホラー見て救われることって絶対あるんです。自分がそうでしたから」

伊藤「はあ……」

北川「うち貧乏で、学校でもぼっちだったんですけど。こっそり見てたホラー映画にいつもワクワクして。あのころ毎日生きるの楽しかったんです」

伊藤「それで自分も作ろうと思ったってことですか。へえ……」

素直に感心している様子の伊藤。

北川「あ、現在進行形で怖い目に遭ってる人と言うことじゃなかったですね」

伊藤「いえいえ、頼りになります」

伊藤ものり弁を手に取る。

■伊藤のアパート・室内（夕）

カーテンのない窓が視界に入るように、固定カメラをセットしている北川。

所在なさげに立っている伊藤、クッションを手渡して。

伊藤「狭いですけど」

と、テーブルを挟んで座る。

北川「ああ、ありがとうございます」

北川もクッションを敷いて座る。

北川「あとは夜を待つだけ、ですね。腹減つてたらさっきの弁当食っちゃってください」

伊藤「じゃ遠慮なく」

× × ×

固定カメラ視点。

黙々と弁当を食べる北川と伊藤。

北川「あの、手がかりというか思い当たることってないですか」

伊藤「淡々と嚙んでいたものを飲み込み。

伊藤「孔雀見えるきつかけですか。ないですよ、今回以外だと、リアルで見たのも何回

かだけだし」

北川「孔雀なんて動物園でしか見ないですよね……他に生活が変わったりとかは？」

伊藤「ないすよ。俺、家族もいないですし変化もないです」

北川「え……？」

伊藤「両親は俺が小さいころ事故で亡くなっちゃって。それからはじーちゃんに育ててもらってたんですけど、そのじーちゃんも

五年前に死んじゃいました」

北川「えつと……奥さんとかは……」

伊藤「アラサーのフリーターですよ？ 家庭持つ余裕なんかないです」

北川「……」

伊藤「何にもないんですよね、俺。孔雀が来る意味も、生きてく意味も」

伊藤、弁当を食べ終えて。ペットボトルの麦茶を飲んでいる。

気まずい北川。

× × ×

夜になり、時を待つ北川と伊藤。

二人ともスマホをいじりながら、チラチラと窓の外を見るが何も起きない。

× × ×

さらに時間が経過し、夜。

北川「……来ないですね」

伊藤「……そうですね。でも毎晩必ず来るんで、ねばってたら必ず……」

ハッと目を見張る伊藤——窓の外を凝視。伊藤の視線に気づいた北川が、カメラを構えて外を見る。

ハンディカメラ視点。

窓の外、夜の闇の向こうで、孔雀がこちらを見ている、

北川、窓を開ける。

孔雀はただ立っているだけ。

感情の感じられない、鳥特有の顔。

丸く真つ黒な瞳。

静かだが、異様な雰囲気である。

北川「出た……本当に……！」

伊藤「言ったでしょ……！ でも、いつもこ

うして見られているだけで……」

北川、突然カメラを構えて窓に足をかける。

伊藤「ちよっ……北川さん!？」

北川「捕まえてきます！ あれじゃ本物かど

うかもよくわかんないから！」

伊藤「つ……捕まえるッ!？」

■駐車場（夜）

転げるように外へ飛び出る北川、

ゆっくりと孔雀に近づく。

間近でアップになる、孔雀の無表情。

北川「何者なんだ、お前は……？ 本当にた

だの孔雀か？」

黙っている孔雀。

刹那、孔雀が首をもたげて声をあげ、極

彩色の羽根を一気に広げる。

北川「三

その迫力に仰け反る北川。

すると孔雀は踵を返して飛翔、駐車場か

ら出て住宅街へと逃げていく。

北川「（慌てて追いかけ）おい、待てッ！」

■住宅街（夜）

迷路のような住宅街を走る北川。

カメラを右に、左にと振るが誰も見えな

い。

だが一瞬、曲がり角の奥に孔雀の尾らし

き影が見える。

慌ててそれを追う北川、荒い呼吸。

曲がり角に辿り着きカメラを向けるも、誰もいない。

困惑しつつゆっくりカメラを持って振り返る。

するとなぜか、未知の奥の曲がり角に、孔雀の尾がちらりと見える。

北川「な、なんで……?」

呼吸を整え、追いかける北川。

角を曲がると——羽根を広げた孔雀が、こちらに向けて飛翔してくる。

北川「わあああッ!」

飛び上がる孔雀の鋭い足爪が、北川の頬を切り裂く。

血がしたたる北川だが、その瞳はもう怯んでしない。

そのまま逃げていく孔雀。

北川は、悔しさに唇を噛む。

北川「クソ鳥公が……人間なめてんじゃねーぞッ!」

意気込んでさらに追いかける北川。

孔雀が、公園の中に入っていくのが見える。

■公園（夜）

北川、孔雀を追って公園に入り、周囲をカメラで見る。

北川「出てこいッ! 大人しく出てこねーと、

羽根むしって唐揚げにしてやるぞッ!」

だが、公園内は静まりかえっている。

響くのは北川の息だけ——

と思いきや。

キイキイト、ブランコが揺れる音。

北川「……ん?」

怪訝そうに北川が向かうと、ブランコに

無表情の少年が座っている。

実はファミレスにもいた少年だが、北川は気づかない。

北川「おい君。この辺りで大きな鳥を見なかったか? ついさつき入ってきたと思うんだけど」

少年、無表情のまま、横に首を振る。

北川「そうか……凶暴な鳥だから、見たらすぐ逃げるんだぞ。それにこんな時間なんだから、早く帰りなさい」

少年『まらくた』

北川「……え？」

少年『まらくた』はお前を見てる」

少年、ブランコから降りてのそのそと帰っていく。

怪訝そうなまま見送る北川。

満月の下、周囲は静か。

カメラを持って見回すが、孔雀は見つかりそうにない。

× × ×

スローの確認映像。

たまたま映ったブランコの下。

少年の足下に、孔雀の羽根が数枚落ちて
いる。

■伊藤のアパート(夜)

ドアから戻ってくる北川。

北川「伊藤さんすみません、孔雀逃がしちゃ
いました……」

だがそこには伊藤がいない。

開かれっぱなしの窓、つけっぱなしの照
明、異様に乾いた空気。

北川「伊藤さん……？」

T『伊藤さんは、その日から消息を断つ
た』

■残っていた映像

T『これは、固定カメラに残っていた映
像の一部始終である』

北川が残っていたカメラの録画映像、

伊藤のアパート。

窓から飛び出していく北川。

伊藤はどうしていいかわからず、立ち尽
くしている。

だが、さらにハッと伊藤が立ちすくむ。
窓の外、数匹の孔雀が現れ伊藤を見つめ

る。

伊藤「これは……まさか……」

伊藤、突然前のめりになり、苦しそうに
嗚咽する。

伊藤「そうか……そういうことなんだな」

体を起こす伊藤、その頭部には孔雀特有
の、鮮やかな青の冠羽が生えている。
すると他の孔雀達が、嘴を動かして。

孔雀A「まあ、そういうことだから……君も
こつちに来る資格あるってことだね」

孔雀B「何も心配しなくて大丈夫だよん。こ
れからは俺達で地球、支配するからさ」

孔雀C「もうひとりじゃないんです、僕達。
『まらくた』に力をもらって、僕らを捨て
た世界と戦えるんです」

孔雀A「行こう。『まらくた』に選ばれた者達
のもとへ」

伊藤「ああ、行こう……」

カメラを見つめる伊藤、その瞳は丸く、
黒い孔雀のそれ。

伊藤「北川さん……これ、公表していいから。
俺から世界への、宣戦布告」

■ビルの屋上（数日後・夕）

落ちかけている太陽、晴天。

置かれた固定カメラに向かって、T
シャツ姿の北川。

その頬には、孔雀につけられた傷の跡が
残っている。

北川「えー……伊藤さんはまだ見つかってま
せん。あのとき撮れた動画もネットにはあ
がってるんですが……」

スマホ画面をカメラに見せる北川。

YouTube ぶしき投稿動画のコメント欄、
「安いw」「なんで孔雀」「どこ需要？」
など、白けた発言が並ぶ。

北川「本物だとは思われてないみたいですよ」
スマホを仕舞いながら、Tシャツを脱ぐ
北川。

北川「でも俺は本物だってわかっています。自

分がカメラを回してたからってわけじゃありません」

北川がカメラの前から少し体をずらす。すると北川の背後から、北川を見つめる孔雀の姿が。

北川「あれから俺の前にも、孔雀が現れるようになりました。どうやら伊藤さんも俺も、あいつらの仲間になる条件を満たしていたようです」

じりじりと迫ってくる孔雀。

北川「けど——俺は、人間を捨てたあいつらの仲間にはなりません。わかるけど」

すっと顔を下げ北川——顔を上げると、その額には、冠羽が。

その瞳が青く輝くが、そこには勇ましくも力強い、人間の意思が宿っている。

北川「あいつらの気持ち、わかるけど、俺の」
北川の背、極彩色の羽根が広がる。

北川「俺の映像は希望だから」
近づいてきた孔雀、空高く飛翔。

北川、固定カメラを傾けて空を映す。

孔雀は急降下、北川を襲おうとするが。

北川も地面を踏みしめ、瞬時に跳躍。

蹴り上げた北川の足が、孔雀の足とぶつ

かり合う——衝撃、破裂するような音。

沈みゆく夕日。

北川の様は人間のために戦うヒーローそのものであり、終末をもたらす天使のようでもある。

了